第10回　東海大学湘南フィルムフェスティバル座談会

信頼関係で医療は成り立つ

出席者　灰田宗孝（東海大学医療技術短期大学学長、健康推進センター所長）
寺田　農（文学部文芸創作学科特任教授）
中澤翼介（文学部文芸創作学科２年、実行委員長）
宇田川卓哉（同２年、副委員長）

第十回目を迎えた東海大学湘南フィルムフェスティバルが二〇一〇年十二月四日に開かれた。僻地の無医村に現れた偽医者という複雑なテーマを扱った上映作品『ディア・ドクター』（西川美和監督）について、医療技術短期大学の灰田学長と文学部の寺田農教授、学生が本音で語り合った。

医師の偏在はなぜ起きるか？

寺田　まず灰田先生のご紹介をさせていただきます。先生は東海大学医療技術短期大学の学長をされています。東海大学医学部を卒業し、神経内科がご専門です。また、本学の健康推進センターの所長でもあります。

　ご年配の方は灰田という名前で心当たりがあるかもしれませんが、先生の叔父様に当たるのが昭和の大スター灰田勝彦さんです。私が小学生のころ、「野球小僧」という歌を歌われていて、これはいまでも歌えるくらいです。それでは先生、『ディア・ドクター』をご覧になっての感想を伺いたいのですが。

灰田　はい。一九八五年に渡辺淳一氏が「雲の階段」という偽医者の小説を書かれています。この小説の場合は、やはり僻地、無医村、医者が来ない、という状況で、あえて村人が知っているかたちで、診療所の所長が高校を出たばかりの男を医者に仕立ててしまう話です。

　今回の映画の場合は、本人が医者になりたいと医師免許証の偽造までしているわけですから、偽医者になるという確信犯だったと思います。ただ、最後のほうにありましたが、村のみんなも薄々気づいていたけれど、あえて彼を医者ということにしておきたかったように思えます。そのバックグラウンドにある、本当に医者がいないという状況が、一九八五年から今に至るまで一向に解決していないことがよくわかりました。

東海大学湘南フィルムフェスティバルは、大学生が企画・運営する映画イベント

寺田　これは大変重いテーマというか、すべての社会の仕組みからして、なかなか解決できない問題だと思うのですが。まず簡単に、正規の医者になるためには、どんな手順があるのか説明いただけますか？

灰田　医師国家試験を受ける資格として、大学の医学部を卒業しなければなりません。ほかの学部を出ていては医師国家試験を受けることができません。この点が司法試験などとは大きく違います。必ず医学部を卒業しなければならないのです。

　看護師の場合は、専門学校、短大、四年制大学、あるいは准看護師になってからの専門学校や短大進学など、いくつかの道があり、最終的に国家試験に受かれば看護師になれます。

　医学部は六年制ですが、今日の上映会のパンフレットにもありますように、学費の平均は国立大学で約三五〇万円、私立では約二二四〇万円。東海大学は六年間で四二〇〇万円かかりますが、国家試験は九割方が合格します。